

國木田独歩と 佐伯の四人の青年(二)

佐伯 山内 武 麟

そうして九月十一日に下宿を出て牛込区南横町に移った。そしてパンと芋、茄子などしか食べない貧しい自炊生活に入ったのである。それにしても、並河は貧民や不幸な人のために生命をなげ出すと言うし、尾間は伝道者として直進しようと言ひ、みんな胸襟を開いて語り合ひ意気揚々たるものがあつた。

独歩は十七日から民友社に勤めることになつた。四人の青年たちも各々の職を探した。富永と尾間との奉公口を民友社の社員桑原氏に依頼したところ、一人を集配係に、一人を配達夫として採用するとの回答があり、二十一日から勤務することゝなつた。

二十一日の尾間日記を見ると、

「昼過ぎ頃、突然民友社に出ている國木田氏から、早

速自分と富永に社に出て来いとの手紙が来た。驚きと喜びは言われない。二人は喜び勇んで一時四十分に家を出て、解らない道を尋ね廻つて、ようやく民友社に着いたのが三時であつた。國木田氏を尋ねて会い、栗原に紹介された。この人は発送の係長で発送事務を総括している人であつた。そして今一寸暇がないので五時頃来いとのことであつたから、三人は一しよに外出して歌舞伎座、本願寺、外人居留地などを見て廻り、途中大福餅を買つて三人で食べた。そして社に引き返して栗原氏に会つた。富永はこのまゝ残つてすぐ仕事に就く、尾間は九時にまた社に出るよう言い渡された。自分は一度家に帰つて夕食を摂り九時前家を出て社に行った。手初めの仕事は横濱行の新聞を新橋停車場に持つて行くことであつた。勿論馴れた人がついて

来て色々と教えて呉れた。そして社に帰り今度は新聞を折ることであった。初めはむづかしかつたがようやく馴れて百四五十枚折った。終ったのは朝の五時であった。」

とある。富永も發送係であった。

ところが翌日の二十二日に、富永が社に出ようと夕刻の五時に夕飯を食べているとき、郵便が来た。国木田からである。それには今夜は尾間一人だけ出ればよい。富永は暫く待機せよとのことが栗原氏からの伝言であると言つて来たのである。これで富永の入社は挫折することとなった。

九月二十三日午後、牛込から麹町区三番町二十六番地に転居した。今井忠治氏宅の隣家であった。牛込から民友社へはあまり遠過ぎるからであった。

民友社を断られた富永は落胆したが、気を取り直して宗教家になることを決意した。また尾間も宗教家になるのが希望であったが、独歩のすゝめで軍人になることを決心して、海軍予備校に行つて問合わせ、試験に合格して二年に編入されて昼間通学して居たが、間もなく勤務

が昼間になったために退学してしまつた。

二十六日に並河がこの同居生活から離れて、上野に居る叔母に当る人の家に行くと言ひ出した。みんなこの件について話し合つて引き止めたが、彼の決心は堅くいくら言つてもきかないので遂に別れることに決めた。彼は二十九日に引越して行つた。『欺かざるの記』の二十日の日記に

「昨日並河平吉氏吾等より別居せんことを申出づ。爲めに吾も彼との交を絶つに至りぬ」とある。

並河には家庭的に複雑な事情があつた。彼の養父であり実の叔父に当る並河貞吉が亡くなるときに、彼を跡目にすると言つた。この遺言が無かつたら彼の入籍も出来ずに、今の養祖母に当る楠家から誰かゞ養子に来て相続したのであらう。彼が上京するとき反対されたのはこの爲めであつた。そうして楠家の一族に一人の少女があり、これが義理上彼の許嫁になっているが、この少女の家に言われない血統がある。それで彼の実母は何とかしてこの婚談から避けたいと考えていたので、彼の上京に賛

成したのは母親だけであった。ところがこの東京には許嫁の少女の親戚が沢山居るので、彼たちの貧しい生活ぶりを見たら、屹度うちに来て安らかに暮せとすゝめて彼を連れて行くであろう。これが彼れ並河を最も苦しめたのである。並河には実の叔母が二人この東京に住んでいた。神田に居る叔母の許へ行って住めば、この難から避けられると言うのであった。

十月九日の朝、朝食をすむと国木田兄弟と富永は借家を探しに出掛けた。今日は山口が言い出した。自分は職を探すため多くの人に頼んだ。内閣官報局や海軍省などに周旋して呉れたが、それも思うように行かない。自分の持っている金は多くない。何時帰国するようになるかも知れないので、旅費だけは貯えておく積りである。それで秋月新太郎氏の周旋で、この人の新宅に食客として行くことになった。君らに対して申訳ないが是非そうさせて呉れ、そして翌朝引越すと云った。

独歩兄弟も富永、尾間も仕方がないとあきらめるより外はなかった。

並河去り、山口も離れて六人の共同生活はくずれかゝった。この九日の晩独歩が言うのに、近い中に両親を呼

ぶ考えだ。六人で暮し、炊事は母にしてもらえば、パンや芋の生活から離れて飯にありつくことが出来よう。そのためにはもっとよい家を探さねばならない。富永と尾間の二人は食料と薪炭費の実費を出して貰い、今まで通り一しょに生活しよう。二人は不本意ながら承諾するよりなかった。

十月十日の朝、また居を移転して平河町五丁目一番地に移った。

この十月十日の『欺かざるの記』の中に、

「吾等の貧は次第に貧なり。

パンと芋とを食ふのみ、肉一片を食はざる也。」

とある。この共同生活の様子は、次の金銭簿で解る。一部をあげてみると、南稷町にはじめて居を構えて自炊生活を始めた九月十一日には

「おけ十五銭、たらい十二銭、ひしゃく二つ四銭八厘はし四厘、そうら二銭三厘、かご二銭、まな板七銭、しゃくし一銭五厘、パン七銭八厘、びん五銭、醤油四銭八厘、芋三銭五厘、茄子一銭、七輪十三銭、すみ二十三銭、砂糖六銭。」

自炊生活の道具を買い揃えたことがわかる。食べ物は、パンと芋と茄子だけである。

十三日は

「パン十三銭、煮豆二銭。豆腐一銭六厘、なす十三銭、砂糖四銭九厘。」

とある。このあとを見ると、パンは毎日買っている。いも、なす、豆腐は一日おきか二日おきに買っている。

この出費は毎月六人が一人一円ずつ出し合って会計し、この金銭簿は炊事当番の者が記入していたらしい。

まことに貧困な生活をしたものだと思ふ。

ところがこゝに一大事が起った。十月十三日、尾間が民友社に出社して、午後四時半頃副社長の人見太郎氏から、次のような驚くべきことが報じられた。それは国木田哲夫を海軍通信員として派遣することに決まった。そして今夜九時五十分発の汽車ですぐ大本営のある広島へ向うという。尾間は驚いてしまった。早速編輯局にいる独歩のところへ行つて、「とうとう行きますなあ」と言うと、独歩自身も全く驚いてしまったと言つてあとの言葉もなかった。

それから尾間は気ぜわしく仕事をすませ、収二君とは一あし先に帰宅した。その時は五時二十分頃であった。

富永にも報らせ、夕食の準備を始めた。今井忠治氏もこれを聞いてやつて来た。六時半頃独歩も帰つて来て準備に大忙しだった。そして五人で夕食を食べた。このお菜は豚肉であった。夕食がすむと大急ぎに七時半頃家を出て民友社に行った。八時であった。独歩はまた大忙しに用事をすませた。九時十五分頃社を出て新橋駅に行き、九時五十分の下り列車で出発した。

独歩は十五日の午前八時すぎに広島に着き、直ちに大本営に出頭して、従軍免許証を貰い、その晩宇品港に碇泊中の御用船西京丸に乗り込んだ。十六日朝出港して佐世保に向い、十七日の朝着き一寸上陸して用事をすませ、その日の午後五時朝鮮の大同江に向つて出港した。十九日に大同江に着き、そこで軍艦千代田に乗り込んだ。そしてこれから戦地へ出動したのである。

富永、尾間、収二の三人は暫く共同生活を続けていたが、十一月八日の昼ごろ独歩の父と母が吉見千代と言ふ年若い婦人を連れてやつて来た。

この日の尾間日記を見ると、

「国木田の父母と吉見千代という婦人が上京して来た。自分は午後五時に帰宅し、六時から富永と並河を誘い三人で麹町区を散歩した。淋しい九段坂の裏から濠に沿って並び立つ松の並木の下には夜霧がたちこめていゝる。月が晃々とさえている下で三人はこれからのことを話し合った。自分たちの前途、この世渡りの困難、そして最も大きな問題は、自分たちが分裂してしまうのではないかと云うことである。それは独歩の両親が来たので一緒に住めないことのためである。そもそもこの約束を破ったのは、国木田哲夫氏その人である。はじめ事を共にしようと志して上京し、のちにその一身上及び家族の生計のためと云え、約束を破って父母を招いた。これではその初め希望していた信仰の生活は出来ない。その上自身は海軍通信員として戦地に行ってしまった。自分は富永と一しょに別れることを決意した。並河はどうかと尋ねた。しかし並河は当分は今のまゝで居たいと言った。そして自分たちは借家を探した。」

これから問もなくこの富永と尾間の二人は別に家を借りて別れてしまい、事実上この共同生活は僅か二ヶ月あまりで分裂してしまつたのである。

しかしこの青年たちは、独歩が戦地から帰還して国民新聞社に戻ってから後は、やはり行き来し親しく交際していた。

この四人の青年は其後どうなつたであらうか。その四人の略歴を記しておこう。

可愛そうであつたのは山口行一であつた。

この翌年二十八年の七月六日に脚氣衝心で急死し、七日に葬儀があつた。

『欺かざるの記』の二十八年七月六日の記に、

「山口行一氏脚氣衝心のため死去したる旨午前九時頃尾間明氏より通知し来りしが故に直ちに牛込に赴く。

茫々乎として夢の心地す。」

とあり、また七日の記には

「一日を正しく送りて安らかに眠らしめ給へ。

山口行一氏の父母の悲を和げ給へ。

人間の死を深く思はしめ給へ。

此の不思議なる汝の宮を感嘆せしめ給へ。」

とある。七日にはその葬式に会し、落合村火葬場に行っている。

九日の記には

「山口行一氏の事を記して家庭雑誌に投ずること。」

とあり、十一日の記には

「吾が友、山口行一は死したり、突然死したり、神よ、

死の恐ろしき事実を痛感し得て、永久の命なる套語に

真意義あることを教へ給へ。」

とあり、また、

「行一氏の父母の悲を和げ給へ」

とある。

富永徳磨の略歴

明治八年十月十九日、佐伯に生まれる。明治二十四年佐伯メソヂスト講義所でウエルソン牧師によって洗礼を受けた。上京後日本基督教会の牧師となって、基督教伝道にその生涯を捧げた。明治二十九年植村正久氏の東京神学会教授となり、四十年駒込基督教会を創立し、大正十四年に新共同神学院を創立した。昭和二年宗教団体法

案の反対を叫び、基督教を守るため尽力した。『有神論大系』『基督教の根本問題』等の著書がある。昭和五年四月十三日に歿した。

富永は独歩とは年齢は四つ下であった。教師と生徒の關係を通り越して親友のように仲よく交際していたらしい。富永は宗教家として生涯を貫くと決心した通り名実ある宗教家となったのである。

尾間 明の略歴

明治十年七月五日佐伯に生れ、昭和二十七年四月二十四日東京に於て歿した。上京後すぐ独歩の斡旋で国民新聞社に入社し、発送係から、後には営業部長、更に専務理事となり敏腕を振り、大正十五年同社を退いた。彼の記録によれば、明治二十五年七月十四日、佐伯メソヂスト講習所でウエルソン牧師によって洗礼を受け、二十七年十一月十八日 東京麹町区一番町教会に転入している。尾間は上京して間もない明治二十七年九月二十一日に民友社に入社し国民新聞の発送係から務め上げて営業部長、専務理事と進んで一生を新聞人として全うした。

並河平吉の消息は不明、多分佐伯に帰ったのではないかと思われる。

(終)